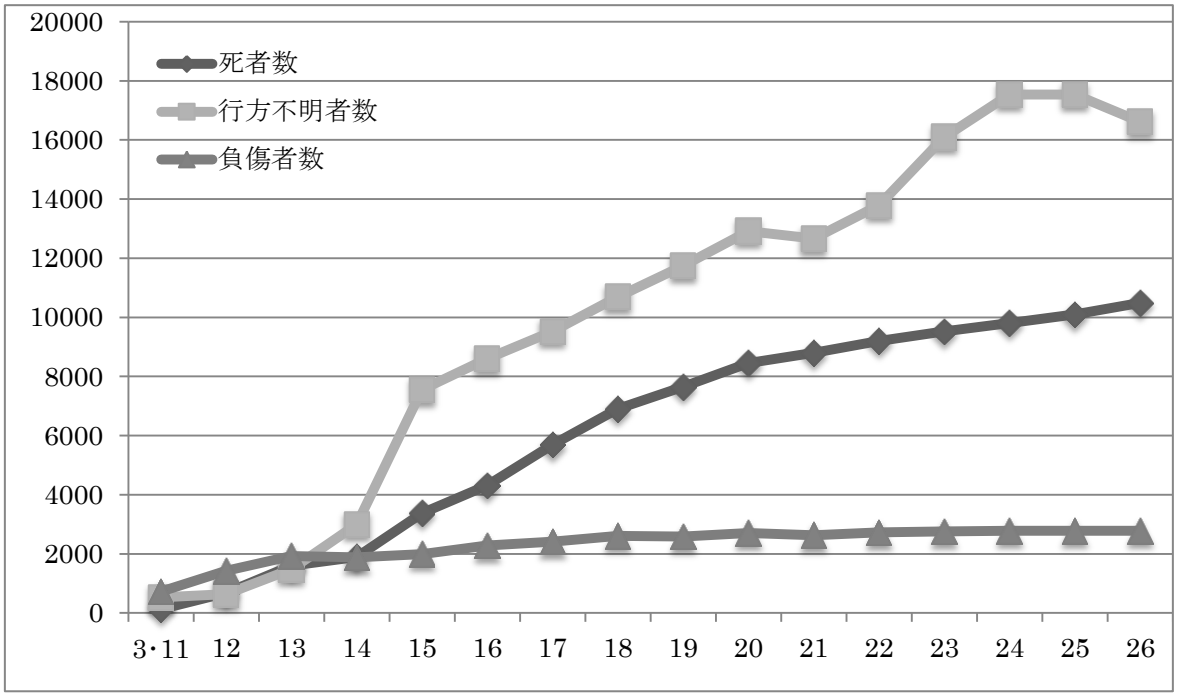
地震後一ヶ月の被災者推移　　～グラフから読み取れること～

高１　ダーツヒストリー

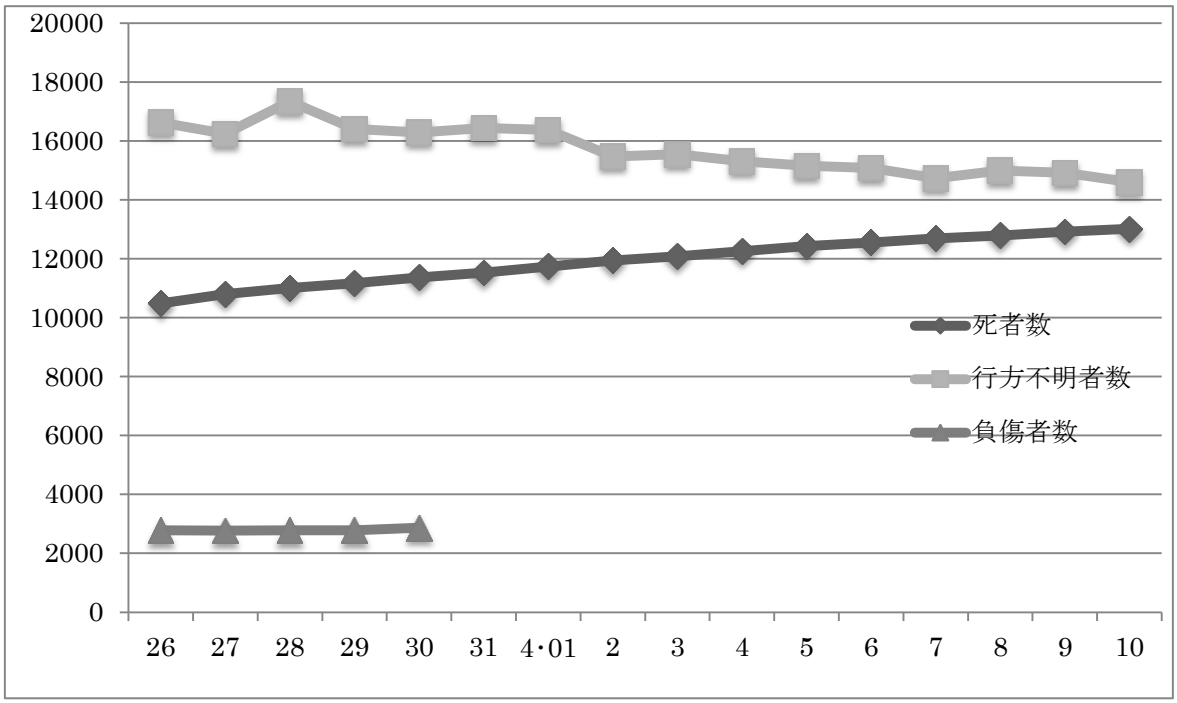
(注意)記録は翌日の朝刊の記述(当日夕方～夜の警察庁まとめ)を引用している。

３・11～３・24(地震後２週間)



このグラフより、震災直後、役所の被災などで情報を処理することができず、
初期の被災確認者数のみは少ない数値を示してしまっている。
その後、災害本部の設立により少しずつ情報の収集が進み、
震災翌日より急激に被災確認者数が増えていることがわかる。
死者と行方不明者はほぼ一定に伸びてしまっているが、
負傷者は軽傷も含むのか、日により増減するがほぼ横ばいである。
３月２１日に行方不明者が減っているのは、
この頃より身元判明者(死亡、生存にかかわらず)が増えたためと考えられる。

尚、本題より少し外れるが、山形方面高速バスは震災翌日から運転を再開。
仙台近郊の鉄道がほとんど動かない中、
仙台方面の高速バスも順次運行を再開していった。



26 日頃から行方不明者がゆったりとした右肩下がりになった。
身元判明が進み、死者、生存確認が増えていっているのだろう。
反面、死者数が不明者の減少量とほぼ同程度で伸びていることから
この頃の死者の一部は不明者の遺体が確認されたものと考えることもできる。

一日 100 人の死亡が確認されていたこと、
それが多いか少ないかは、残念ながら私には理解し得ない。
しかし、未曾有の大災害によって、20000 人以上の死者が出たことは事実である。

それを踏みしめた上で、これから日本がどのような方向に向かっていくか、
国民はそれをじっくり精査するという義務が課せられているのであろう。

注)4 月 1 日の朝刊より負傷者の記述が終了したのでその先は不記入である。

――――地震は、何を変えたのか。　（編集後記）

私自身は、震災当時地元の駅にいたため、停電以外の被害は特に無かった。
社歴部員の中では唯一屋外にいたということで幾らか感想を求められたが
私の視界内では電柱がゴム棒のように大きく歪み、周りの人々が震災の中、

現状を理解できずパニックになっていた人。
家にいると言う家族の安否を気にしていた人。
冷静に地震の過ぎた後のことを考えていた人。
車を停めて地震が収まるのを待ち続けた人。
コンビニが停電で自動ドアが閉まらずレジも動かない中、
そのような状況下でも営業を続けると言ったコンビニの店長。

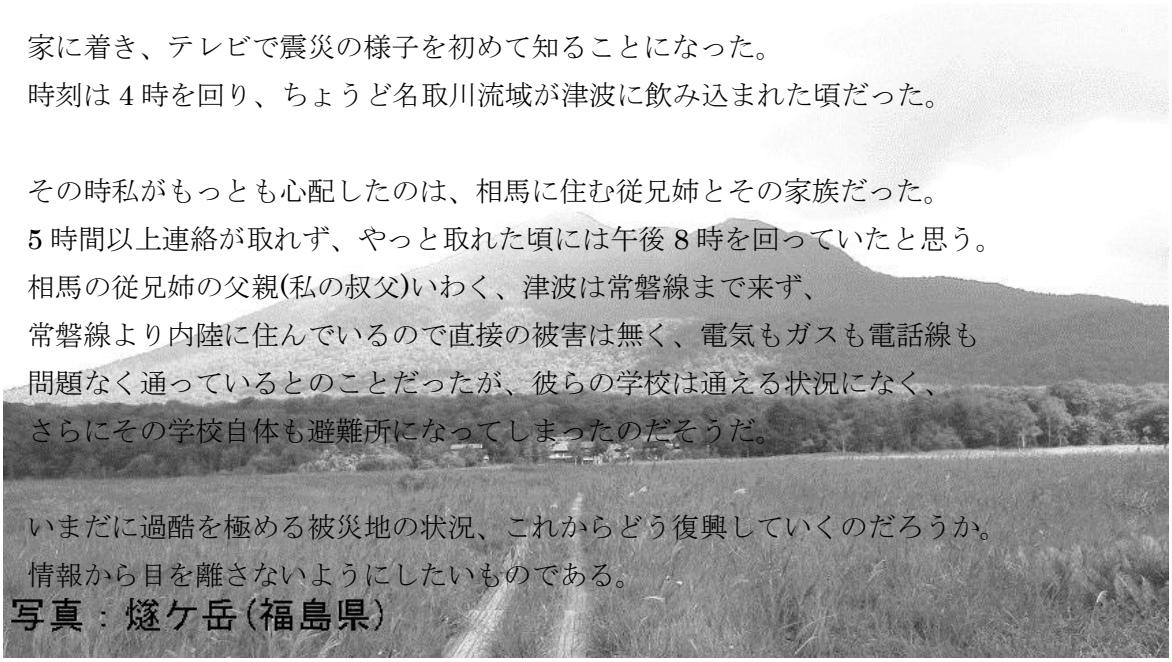
こうして、ただ周りを見回しているだけでも、いろいろな人がいた。

当然電車は止まり、その後１週間再び動き出すことはなく、
バスが唯一の交通手段となった。
しかしその日１日信号は機能せず、交通は混乱、
警官が交通整理と事態収拾に当たっていた。

家に着き、テレビで震災の様子を初めて知ることになった。
時刻は４時を回り、ちょうど名取川流域が津波に飲み込まれた頃だった。

その時私がもっとも心配したのは、相馬に住む従兄姉とその家族だった。
5 時間以上連絡が取れず、やっと取れた頃には午後８時を回っていたと思う。
相馬の従兄姉の父親(私の叔父)いわく、津波は常磐線まで来ず、
常磐線より内陸に住んでいるので直接の被害は無く、電気もガスも電話線も
問題なく通っているとのことだったが、彼らの学校は通える状況になく、
さらにその学校自体も避難所になってしまったのだそうだ。

いまだに過酷を極める被災地の状況、これからどう復興していくのだろうか。
情報から目を離さないようにしたいものである。



写真：燧ケ岳(福島県)